MAENAN SAH Journal Vol.153

～『自分で考え、判断し、行動できる生徒の育成』をめざして～ 2026/3/16

SAH×探究 2年探究活動発表会　報告Ⅲ

今号も「2 年探究発表会」を特集しました（第 3 弾）！「発表会を終えての感想」を4ページで紹介します。（編集　教頭）

2/17 探究発表会を終えての感想

①探究のテーマ　②探究活動の内容　③探究をおこなってのふりかえり（課題、新たな発見・疑問など）

２年探究活動の「内容」

①自分が興味・関心のあるテーマ・課題の設定･･･フィールドを地域（主に前橋市）、学問に設定

②探究活動の中で外部機関（自治体、企業、大学、研究所等）を訪問し、新たな知見を獲得、自分達の解決案の提案、考えをぶつける

③2 月に探究活動のまとめを発表

「成果発表」の側面はあるが、探究活動の「経過・過程」の発表を重視

①障害者にとってよりよい街づくり（就労支援について）（2 年　町田和子）

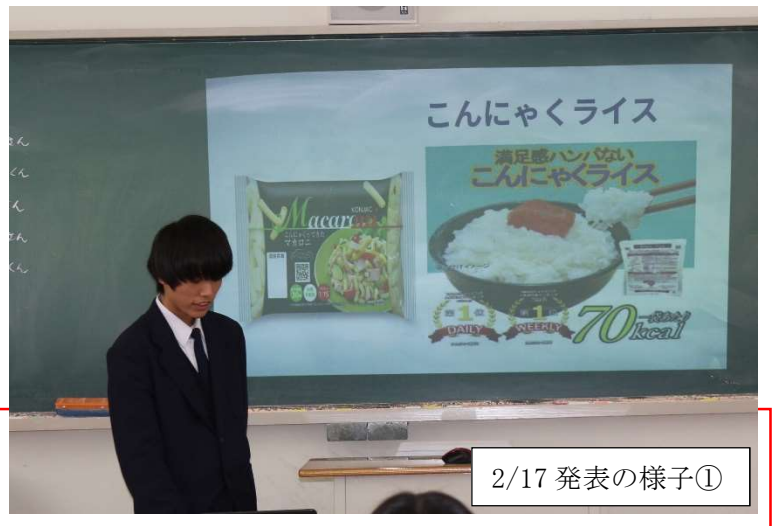
②障害を持っている人と、そうでない人の雇用にはどのような違いがあるのか興味を持ちテーマに設定しました。外部へは、「障害者就労支援の課題」「従業員 40 人未満の企業の障害者」「就労に対する声」などについて質問し、たくさんの資料と共に、課題とそれに対する今の取り組みなど貴重なお話をしていただきました。

　これらを参考にして、「HELP カード」障害者が気軽に助けを求めることができ、手助けする人も快くできる仕組み「UD シール（ユニバーサルデザインシール）」普段使用していて不便に感じるところを、ユニバーサルデザインに変えることを職場に意識づける仕組みを提案しました。

③私たちは外部への質問をするまで、就職先を見つけ、そこに就職するまでに主な支援の必要性があると考えていました。しかし、最も重要で支援が必要なことは、「就職した職場で、長期的に働き続けられること」だと教えていただきました。そのため、私たちは、「障害を持っている人が気軽に安心してヘルプを出せる職場を作るにはどうしたらいいのか」という観点から、長期的に働き続けられる環境づくりを促進する提案をすることができました。

　外部の方のお話や、頂いた資料からは、私たちが注目した観点以外にも多くの障害者就労支援に関する課題を見つけることができました。総合の発表だけに留まらずに、これらも考え続けなければいけないなと思いました。

【所見・アドバイス】最初の課題設定で「障害を持っている人と、そうでない人の雇用にはどのような違いがあるのか」という問いから、「どのような違いがある」と仮説を立てました（予想しました）か？この検証ができていくと「探究」として継続した学びとなっていきます。次に、質問訪問により「就職した職場で、長期的に働き続けられること」が大事だとわかったことでその環境とづくりを促進する提案ができたとあります。3 年 1 学期でその提案をあらゆる角度から検証してみるとまた新たな壁や課題が浮かび上がってくるかもしれません（こなければそれは素晴らしい提案ということです！）。「雇用する側」「一緒に働く従業員」の立場で考えてみる、給与面、待遇面など「みんなが納得する落としどころ」はどのくらいなのか、国や地方自治体が具体的にどのような点でサポートできるのか、教育がどのように関われるかなどなど。



2/17 発表の様子①

①農業の担い手不足について（2 年）

②農業への関心があったから。「一般の人は農業へのイメージが悪い（3k汚い、きつい、危険）だか、実際の農業従事者はやりがいがある、社会の役に立つなどイメージのギャップがあるこ

とがわかったので農業のイメージを改善することができれば解決できるのでは？」という仮説。

「『グリーンツーリズム』を利用して農業へ関わりを持ち、そこから魅力を得て農業へ携わってもらう。加えて、私たちの発表を通して日本の今の現状をみんなに発信して知ってもらう」という私たちの提案をどう思うのか、今の農業のさまざまな現状、今の群馬での取り組みなどを群馬県庁に聞きに行った。

③群馬県庁の方でも、どうすればいいのかとても苦戦しているとおっしゃっていて、とても難しい問題なんだなと実感しました。よって、私たちの提案では根本的に解決するのは難しいという結果でした。しかし、いろんな人に知ってもらって興味を持ってもらうための農業への入り口を広げるという点ではいいのではないかと群馬県庁の方に言っていただけたので良い探究ができたのではないかなと思いました。探究を通して私たちも日本の農業のことについて勉強することができたし、他のみんなにも知ってもらえたのでよかったです。最初はどうすれば良いのかわからなくて全然話が進まなかったのですが最終発表では私たちが考えることを探究して全力を尽くせたのでよかったです。

2/17 発表の様子②

【所見・アドバイス】仮説の設定が◎！提案が難しいと言われたのは、どういう点だろうか。そこで出てきた課題の解決を考え、もう一度提案を練り直したり、または新たな提案を出したり、などもう一周入れると「探究」になると思います。「会社で新たな企画を通すときに、何度も何度も上司や役員にプレゼンをして問題点を指摘されながら修正または新たな案を練り直し、オッケーをもらい、そして商談のプレゼンに臨む・・・」というのが企業の中ではあります。指摘されたところをブラッシュアップしていく、再び頭をフル回転させて解決案を考えて３ 年一学期にいけるところまでいってまとめると探究の入り口から一段階上がれそうですよ。

①前橋 VS 高崎　ブータンの国民総幸福（GNH）を取り入れたことによる変化（2年　小林璃久）

②私の探究は、高崎経済大学の論文で「国民総幸福量（GNH）」という概念に出会ったことをきっかけに、「ブータンの国民総幸福を取り入れたことによる日本経済の回復」を私の探究のテーマとし、自分が出会った論文が書かれた、高崎経済大学の野崎教授にアポをとり、野崎教授にお話を聞き、ブータンや国民総幸福について様々なことが分かりました。しかし、もともとのテーマが大きかったので野崎教授に助言を頂き、今の探究のテーマである「前橋 VS 高崎　ブータンの国民総幸福（GNH）を取り入れたことによる変化」になりました。そして、経済成長を示す GDP（国内総生産）だけでは測れない「真の豊かさ」を群馬県の主要二都市に当てはめて再定義することを目的に開始しました。

　私は、「経済規模（GDP）では高崎が圧倒するが、精神的充足や社会的なつながりを重視する GNH の視点を加えれば、前橋が拮抗、あるいは上回るのではないか」という仮説を立て、両市の人口統計（高崎約 36.4 万人、前橋約 32.7 万人）や内閣府・熊本県の先進的な幸福度調査データを用いて多角的な比較検証を行いました。調査の結果、高い経済力を持つ高崎市は「稼ぐ力」で勝る一方で、内閣府の分析で満足度への寄与が最も大きいとされる「生活の楽しさ」や「ワークライフバランス」の確保が幸福度向上の課題であることが判明しました。対して前橋市は、行政都市としての「良い統治」や落ち着いた「自然環境」において GNH のスコアを伸ばす強みを持っており、GDP という物差しだけでは見えない都市の価値が、

GNH の視点によって仮説通りに浮き彫りとなりました。最終的に、前橋独自強みや幸福度視点を加え、前橋市「住む人が自ら力で幸せを芽吹かせることができる街」として、経済力において勝る高崎市をも凌駕し、新しい豊かさ基準において県内・国内をリードする存在になることができると結論付けました。

③私は、高崎経済大学の論文で出会った「国民総幸福量（GNH）」という言葉に惹かれ、前橋市と高崎市をこの指標で比較する個人探究に挑戦しました。

高崎経済大学の野崎教授への取材や内閣府の統計データ、さらには重回帰分析といった大学レベルの手法を取り入れ、客観的な分析を試みました。その結果、経済規模で勝る高崎市に対し、前橋市は「良い統治」や自然環境など、GNH の視点で独自の強みを持つことが分かりました。「幸福度で見れば前橋は高崎に拮抗する」という私の仮説が、データによって裏付けられたのです。

この活動を通じ、数字を使って人の感じ方を可視化する難しさと面白さを学びました。将来は大学で経済学を深く学び、データに基づいたより良い社会づくりのために貢献できる専門性を身につけたいと考えています。

【所見・アドバイス】GNH という学術的指標を用いた分析で高崎と前橋を比較するという試みは興味深いですね。なんとなく「高崎＝経済的なまち、前橋＝行政的なまち」、「高崎の方が前橋よりも栄えている」というイメージを指標に基づいて分析していくことはより学問追求型の探究として評価できると思います。さらにワンランク・ツーランク上に行くためにアドバイスをするならば、探究のテーマ「ブータンの国民総幸福を取り入れたことによる日本経済の回復」と今回の前橋・高崎の比較研究の関連性が見えないこと、特に「日本経済の回復」に対する結論、方向性が見えなかったところが一つ、そして実際に住んでいる住民の声を聞く、違う指数で比較分析をするとさらに説得力のある研究になると思います。

①未来を切り拓く力 女性の社会進出と共に進む未来（2年）

②テーマ設定のきっかけ最近では「女性の社会進出」という言葉をよく聞くが家庭と仕事の両立は難しいというイメージがまだ残っているので、女性の社会進出の現状や課題を知り、将来に繋げたいと思ったから。

・仮説企業が働きやすい環境を作ることによって女性の働くことに対しての意識が高まり、女性のキャリアアップであったり、労働人口の増加に繋がるのではないか

・検証方法インターネットで調べてグラフで現状を把握し、外部へ質問をした

・訪問先サンヨー食品株式会社、群馬県庁の労働政策課

・外部への質問内容◯ジェンダーに関する課題や今後さらに取り組みたいこと

◯女性が活躍するために高校生のうちにした方がいいこと　◯今後のキャリアや昇進に関する考え

◯女性の働きやすい環境をつくるために意識していること、また何が必要か　◯管理職に占める女性の割合

・検証結果働く世代の女性にとって家庭と仕事の両立は困難であり、キャリアや昇進について考える余裕がない。管理職に占める女性の割合は低い傾向にあった。現代の人は無意識の思い込み（アンコンシャス＝バイアス）を抱えている。特に女性は自尊心が低く、社会進出が進まない。外国人や高齢者、性別にとらわれない職場をつくること、心理的安全性をもつことが大切。

③今回、外部へ質問をして無意識の思い込み、アンコンシャス＝バイアスについて知りました。お話を聞いて、私自身、無意識

のうちに思い込みで決めつけてしまうことがあるなと感じました。周りの人たちも思い込みで決めつけてしまうことがあるようです。そのような思い込みが「女性だから」「男性だから」というような私たちの固定観念に繋がってしまい、女性の社会進出が進まないのだとわかりました。これからの課題としては無意識に固定化された考え方や周囲からの影響に流されず、自分自身の意志を持ち、周りを気にしないようにすることが重要だと思いました。また、管理職に占める女性の割合が低いのは家庭と仕事の両立が難しいというのもあるが、周りの目、無意識の偏見であったりその場の環境もやはり影響しているのではないかと考えました。改めて、職場の環境整備は重要なのだなと感じました。

【所見・アドバイス】③のふりかえりでは、「無意識の思い込み」が鍵と感じたようですね。その解決には、「職場の環境整備」という点に目が向けられていますね。「無意識」なら心理学の視点からでも、職場環境なら経営のマネジメントからでもアプローチできますね。複数の観点から改善していく必要があるテーマ、世の中の諸課題はそういうものばかりです。

★SAH 事業を担当する県教育委員会高校教育課の峯川浩一指導主事より本校の探究活動についてコメントをいただきました。

去年から今年にかけての探究の取組の進化は、本当に素晴らしいと思いますし、先生方の尽力には頭が下がります。それにこたえていく前南生の進化も楽しみです。

ちなみに、探究は最初の「課題設定が難しい」というのは普遍であると思いますが、今年色々な学校の様子を見せていただくことで個人的に気付いたのが、「探究が探究らしく見えるか（良い意味で）」、「調べ学習っぽく見えるか」の差は「仮説」の有無であるのではということです。

ある高校の探究で、「電線に止まる鳥の性質」というテーマがありました。このテーマの仮説が「大きい鳥は電柱の近くに、小さい鳥は電柱から離れた所に止まるのではないか？」でした。データの数は十分でなかったものの、この仮説に基づき、電柱に止まる鳥の写真を何十枚も撮影し分析した内容はなかなかのものでした。単に鳥が好きなだけの生徒がなんとなく思っていたことが、この仮説により急に探究に昇華したように感じました。

課題設定と言うと難しく感じるのですが、「〇〇なんじゃないかなー？」という仮説を立てているかどうかが、その学校の探究っぽさに影響しているのでは？というのが、今の私の仮説です。

編集後記探究の学びがもたらすもの

私は高崎経済大学附属高校に勤務していたとき、高崎経済大学経済学部矢野修一教授のゼミとの高大連携コラボゼミをおこなうこととなりました。3年文系クラスの1クラス（オナークラス）が 3 年一学期から 9 月中旬にかけて月に2回程度高経大を訪れ、「日本企業の海外戦略」というテーマで、矢野ゼミの大学 3 年生と指定された企業を調べ課題を発見し、夏休みに実際にその企業を訪れて自分達が見つけた課題や戦略を提案したり、企業の方々から話を聞き知見を広げたりしました。この企業訪問にあたって、「調べてわかるものは聞かない」という研究では当たり前のことを頭に入れ、荒削りながらも自分達なりに多角的に調べ分析して考えた提案を企業にぶつけました。企業の担当者と「それは鋭い質問だね」「若い人の意見を聞かせてほしい」「その提案はおもしろいね。けど、実現するにはこういう点が課題だと思うけどその点はどう考えてる？」などのやりとりがあり、正面から受け止めてくれる企業とやりとりをするという貴重な経験ができました。大学のその先をイメージでき、自身の世界を広げ最後の進路（大学受験）に歩みを進めます。前南 2 年生探究活動の「質問訪問」も同様な体験となったはずです。（教頭　長岡）